

## 9. ナシ紅粒がんしゅ病の罹病部の切り戻しや削り取りによる 耕種的防除技術

### 1. 背景とねらい

紅粒がんしゅ病は、ナシの新梢だけでなく、骨格を形成する主枝・亜主枝なども枯死させる病害で、近年多発傾向にある。本病は、切口などから感染し、半年以上の潜伏期間を経て枝幹に病徴を発現する。このため、薬剤散布のみでの防除は困難であり、罹病部切り戻しや削り取りと薬剤塗布が重要になる。

そこで、発病抑制効果が安定する、切り戻しや削り取りの程度を明らかにする。

### 2. 成果の内容

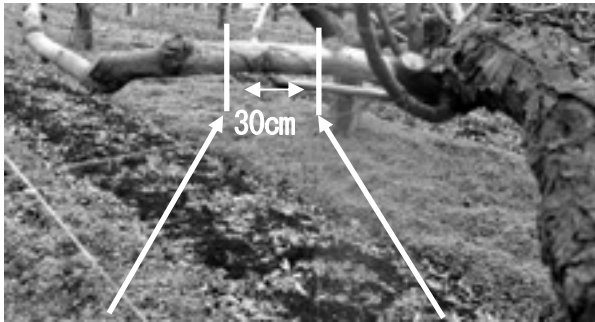
- 1) 紅粒がんしゅ病の病斑は、枝単位および骨格枝上に形成され、周縁にオレンジ色の粒状の分生子子座が認められる（図1、図2）。
- 2) 罹病枝は、病斑部と健全部の境界から基部方向に、30cm程度切り戻すことで防除効果が安定する（表1）。
- 3) 骨格枝上の病斑（図2）であるため、上記のように30cm切り戻すことが出来ない場合には、木質部が褐変している部位を削り取り、チオファネートメチルペースト剤を原液で塗布することで、防除効果が認められる（表2）。

### 3. 普及上の留意点

発生源になるせん定枝は、園内の菌密度を下げて感染を抑制するために、園外に持ち出し、土中に埋設する。

(果樹研究部)

#### 4. 具体的データ



病斑と健全の境界 切り戻す位置

図1 側枝上の病斑は切り戻し処理で対応する

表1 罹病枝の切り戻し程度と防除効果

木部褐変面積に対する処理面積の比率(倍)	処理箇所数	累積発病率(%)		
		2007 11/15	2007 12/11	2008 1/31
1	1	0	0	0
2	8	0	0	0
3	7	0	0	0
4	3	0	0	0
5	5	0	0	0
7	1	0	0	0
8	1	0	0	0
12	1	0	0	0
18	1	0	0	0
24	1	0	0	0

処理日:2006.11.10. 調査対象:30年生「幸水」26樹



骨格枝上の病斑 木部の褐変

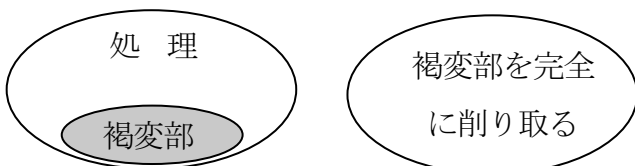


図2 骨格枝上の病斑は褐変部の削り取り処理で対応する

表2 罹病枝の削り取り程度と防除効果

木部褐変面積に対する処理面積の比率(倍)	処理箇所数	累積発病率(%)		
		2007 11/15	2007 12/11	2008 1/31
1	1	0	0	0
2	8	0	0	0
3	7	0	0	0
4	3	0	0	0
5	5	0	0	0
7	1	0	0	0
8	1	0	0	0
12	1	0	0	0
18	1	0	0	0
24	1	0	0	0

処理日:2006.11.10. 調査対象:30年生「幸水」26樹